

【タイトル】

〈登場人物〉

闘

錬金術師、便利屋。眼鏡をかけた守銭奴。

ルイズ

筋肉質な身体を持つ傭兵まがい。暗殺が得意。

◆研究施設（夜）

◆施設内、廊下が続く

廃墟にも似た古びた廊下を、何人もの人間が銃器や武器を手にとって走り回っている

何度も銃声が鳴り、どこかにいる人物へと発砲が行われる

SE バタバタ……！

SE バン！ ガンッガンッ

SE きゃあっ

SE そっちだ！

SE ドガガガガッ

黒いスーツや白衣を着た研究員があちこちにいて、慌てている

研究員は避難、黒スーツは戦闘を主に行っている

黒スーツの人間はあたりを警戒しながら発砲を続ける

あたりから何度もトラップが発動し、稲光のような閃光が走ったり爆発したりする

モブ1 おい、ネズミはどこに行った

モブ2 そっちを捜せ、七番通路も見えて来い！

モブ3 畜生……どこにいやがる！ 早く出てこねえと頭ぶっ飛ばすぞ！

SE バン！ バン！

あちこちを見回すモブ。

どこにいるのかわからないその人物たちを探し回る黒スーツ

やがて暗闇のなか、誰かがいる気配を感じとる

◆暗い廊下

モブ1 おい、あっちじゃないか!?

モブ2 見て来い！

モブ3 はいっ

謎の人物——李闘斗とルイズ・クリスターニャが建物内にある両開きの扉へ迫る

闘斗の眼鏡とルイズのナイフ、光る
にや、と笑う二人

闘斗
いくぞ

ルイズ
ああ

◆研究室の一室

SE
ガツッ

SE
バアンッ

内側（モブ側）に蹴り破られる観音開きの扉
脚の位置は高く、蹴り下ろされるように扉が開いた
モブε、もんどり打って倒れる

SE
ザッ

闘斗
こんちゃーす、便利屋でえーす!!

闘斗、モブの頭の横を通り過ぎるように一歩踏み出す
闘斗の顔はまだ見えない感じ

闘斗
いけない子たちのオシオキにきましたよーっと

扉にぶち当たったモブε。強かに鼻とか身体とかぶつけまくる
DIOとDIA、ルイズのナイフなどクローズアップ

モブ3SE
ぐあっ、がっ

モブ、痛みに悶えながらも闘斗の方を見上げる
見上げた先には眼鏡を直し、怪しい笑みを浮かべる闘斗

モブ3
李……

DIOとDIAを両手に構え、モブ3を見下ろす閏斗

一切油断せず、DIOをモブ3に、DIAをその他の黒スーツに向けている

モブ3 閏斗……！

見上げられた閏斗、を片手に不敵に笑う。

閏斗

あーら、名前、憶えてくれちゃって。嬉しいことこの上ねーわ。とりあえず、お届けもんがあるんだけど

ルイズの方を振り返る閏斗

まだ影の中にいるルイズ。紅い瞳がゆらりと暗い中に灯る

その足元でモブ3、呻きながら叫ぶ

モブ3

くそっ、表の奴等は、見張りはどうしたんだ！ なんて便利屋がここにいる！？

SE ぬっ……

暗闇の中から出てくるルイズ

右手に二人、左手に一人の黒スーツを掴んでいる

モブ3の前に投げ出すルイズ

笑顔らしい笑顔ではないが、やや得意そうな表情を浮かべている

ルイズ

その〈見張り〉ってのはこいつらのことか

SE ドサッ

見張り数人 ぐあっ

閏斗、ルイズの傍に駆け寄って左肩に右ひじをかける。余裕の表情で、DIAを一度ホルスターに戻し、左手をフリーにする

閏斗

でことで、お届けもんでしたっ。サインなら要らないぜ

左手をひらひらと振って「要らない」を強調する閏斗
悔しそうに見上げるモブ3

閨斗 ルイズってばやるじゃん。さすが俺の相棒

にこここ笑う閨斗に対してルイズはクールな表情、無関心ともいえる表情を崩さない

何か警戒することがあるのだろうか、気を抜かないルイズ

閨斗はその表情を見て、ぽかんとした顔になる

ルイズ 褒めるのは後だ。ちゃっちゃと片すぞ

閨斗 おいおい、褒められて嬉しくねえのかよ、ルイズ・クリスターニヤさんよお

ちよつと不服そうな閨斗。ルイズの言動が気に入らないようだ

口をとがらせて「ぶー」と子供のように拗ねる

それでもルイズは涼しい顔をしている

クールな口ぶりで、ルイズは閨斗の質問に答える

ルイズ 今のところ嬉しくないな

閨斗 何で？

少し目を伏せるルイズ

憂いを帯びたような、しんとした瞳

かっと目を見開いて、

SE カッ

ルイズ そりゃあ

見開いた瞳は、輝いている。ルイズの中に確かな気持ちがあるようだ
これまで真剣な顔を浮かべていたが、一転してコミカルな描写で、

SE ぐぎゅるう〜……

ルイズ 腹が減っているからに決まってるだろう！

SE どん

閨斗 おあー。やっぱりかー

もはや呆然としている閨斗

その間にも、そろそろと黒スーツが集まってくる
徐々に囲まれ、モブも立ち上がって銃を構える

モブ
おい、そこにいたぞ！

モブ
チャンスだ、やっちまえ！

臨戦態勢に入るルイズと閨斗

ぎらりとした瞳で敵を見遣るルイズ、閨斗

背中合わせに立ち、ぐるりと見渡して敵のことを把握する

互いに一瞬、視線を合わせて頷く――ぽつり、小さくルイズの声が閨斗の耳に届く

ルイズ
閨斗。仕留めるぞ

閨斗SE
おっけい！

閨斗、ルイズの声とほぼ同時に自身から見て右手に駆け出し、DIOを手にする。

DIAには手を掛けず、腰のポーチから試験管を取り出した。

閨斗、DIOに緋色の結晶が入った試験管を入れぶっ放す

ルイズは身をかがめて閨斗の後ろでナイフを構え、閨斗の背の向こうへ。閨斗に背中を見せて、ルイズから見て右方向を見ている

閨斗の目の前、燃え上がる。火炎放射さながらにDIOはごうごうと炎を吐き出す

SE
ゴオオオオッ

はあーっはっはっは！ どうだよ、この新しい錬成結晶は！
アルキミスタ・クオーツ

高らかに、ちよつと下衆っぽい笑顔で声を上げる閨斗

DIOの銃口から炎が放たれ続ける。あちこちで悲鳴と断末魔が響き、煙が上がる

何人か、炎に当てられて焦げる。それを見て慌てて逃げ出す黒スーツ

モブ
ひ、ひいっ

モブ
逃げろ！

モブⅡ だけでなく、転がされていた見張りたちも散り散りに逃げていく。が、それでも果敢に戦おうという黒スーツは何人かいた

辛うじて銃を撃つモブⅣ、しかしすぐに前にも後ろにも炎が迫る

SE ガンッ ガンッ ガンッ

モブⅣ た、助けてくれえ

いやだ、死にたくな――

SE ぎゃああああああつ！

炎が舞う中、闘斗は素早く敵の動向を見る。

右後ろに構えていたルイズにはんの少し目線をやる。

闘斗 そっちだ

言われた方向と同時に飛び出しているルイズ

一人目、モブⅠ。右の逆手に持ったナイフを左肩の方へ振り上げ、突き刺すように切りかかる。

モブⅠの胸に右手ナイフが刺さる。下げた左腕を右方向へ旋回させるようにして斬りつけて床に落とし、右足でバックステップ、すぐに左脚を踏み込んでモブⅠに左脚のミドルキック、モブⅠの胴体にぶつける。

モブⅠ ぎああ

があッ！

モブⅡ ぐあつ

二人目、モブⅡ。モブⅠがぶつかったせいで体勢が崩れるも、なんとか踏みとどまりモブⅠを振り払って銃を構える。その一瞬にルイズはモブⅡに接近しており、左脚を踏み込んで右手のナイフをモブⅡの右前腕、銃を持っている腕へ斬撃を当てる。吹っ飛ぶモブⅡの右手

モブⅡ ひ、ひいい

吹っ飛んでいった右手を余所に、ルイズは右腳踏み込んで左方向に回転、左手ナイフの切っ先を、肘を曲げつつモブⅡの喉に突き刺す。頸椎の向こうまで突き

刺さるルイズのナイフ

モブ
が、ああ……ッ

ルイズ、左脚でモブを蹴り飛ばして頸椎からナイフを抜き、血を払う。崩れ落ちるモブ

それを見ていた閨斗、ひゅう、と口笛を吹いて称賛

SE
パチパチパチパチ……

閨斗、ルイズ、気を引き締めて拍手の音がした方を見る

親玉
グラツツエ！ 流石、便利屋さんだねえ

閨斗
出やがったな。アンタが親玉か

親玉
親玉なんて大したものではないよ

そこに転がっている奴等よりは少しだけ偉い立場にいる、というだけさ

それを親玉って言うんじゃないのかよ

閨斗
はっはっは、きみたちが――

このリベリア中で活躍している便利屋のきみたちが言うなら、そうだろうね

よかったよ、△の奴等に奪われてしまったのかと思った

きみたちは、私たちMの研究員になってもらわないといけないからね

閨斗、ルイズ、にやりと笑う

それを見て満足そうな親玉

閨斗
で、親玉さんよ。ちょっと用事があんだけどさア

ルイズ
あんたの首、もらおうか。もちろん、命ごとな

親玉、にやりと笑う

親玉
そうはいかないものでね。

閨斗くん――きみは、どうしても我々の仲間にならないのかい？

ぴくり、と反応する閨斗

少し心配そうに見るルイズ

親玉

きみの求める『理想』は、我々の求める『正義』と重なる部分がある
悪い話では、ないはずだ

ルイズ

……闘

親玉

我々に協力してくれないか、闘くん

そうすれば、きみと、我々の求める

——真の『正義』に、近づけるのだ

闘、少しの間、沈黙する。色々と思い出す闘

◆闘の回想

女性

闘

あなたのことが、好きよ

ずっと一緒に、闘——

◆回想終了

◆研究所内、親玉の目の前

闘

……はッ

親玉さんよオ

闘、DIOに試験管を装填

DIOを親玉に向け、静かに見据える

闘

アンタに俺の何がわかるんだよ

ああ、そうさ

アンタにとっちゃ、それが正義かもな

世界エネルギーの転換、幸福理論の構成、黙示録の書き換え……

そういうもんで幸せになれる奴ってのは、少なからずいるだろうよ

でもよ

闘、にやりと笑い、激しい表情に

大声を出して、親玉を罵倒する

闘

アンタが思う正義ってのが俺にとって『正義』である必要がどこにある?!

俺たちはただ、俺たちであるだけだ!!

ルイズ

闘

闘

何度も言うがなあ、ルイズ

俺はお前と便利屋やってんのが性に合ってるんだよ
だから

闘、しっかりと前を向く。迷いはもうない

闘

猫探してから人殺しまで——この便利屋におまかせあれってな!

ルイズ、不敵に笑い武器を構え直す。迷いの消えた闘の表情と言葉に、満足
している。

闘、親玉に向かって駆け出す。一足飛びで親玉に近づき、至近距離でDIOを
ぶっ放そうと試みる

ルイズ、後にく。逆手に持ったナイフで切りつけようと駆け寄りながら体勢
を整える

親玉

おっと

お前たち、奴等を捕まえなさ——

って、いないっ!?

あーらら、人望ないねえ親玉さんよオ!

ルイズ

くえ

闘がDIOで足元を氷漬けにし、ルイズが親玉を斬りつけ、ぎりぎり殺さない
程度、致命傷未満くらいの傷を与える

ぶっ倒れる親玉。見届けて、ルイズと闘、軽くハイタッチ

SE

パチンッ

◆ ★場転

闘、ヤンキー座りで所長を見ている

闘

あーあーあ。なんかもうなんか。なーんかなー

SE チャキツ チャキツ カシャツ

閨斗 あれが高級羊肉八〇〇グラム……

 あれが試験用コバルト系鉱石二〇〇グラム……

 あれがルチル鉱石粉末三〇〇グラム……

ルイズ 何だ、その呪文は

閨斗 あア？

 これはなあ……

 DIOをぶらぶらと垂らしたり回したりして、手遊びする閨斗

 突然その手を止め、拳を握る

閨斗 この戦いで使った錬成結晶をゲルト額に換算したもんだよ！

ルイズ はあ……やつぱりそれか……

閨斗 絶対！ 絶ッッッッッッッ対に！ 十万ゲルトじゃあ割に合わねえんだよ畜生がッ！！

 ルイズは腕組みしたまま見ている

 ぶちギレる閨斗。あまりのキレっぷりに拳はぎりぎり鳴るし額には血管が浮きまくっている

閨斗 何で俺がたったの十万ゲルトで錬成結晶を七個も使わなきゃなんねーんだよ！

 意外としぶといんだよ、この×××××××どもがッ！ ㄱ××××！！

親玉 ひいい、や、やめっ

 もう、もうしない！ 少なくとも私はもうやめるから！

 だから許してえ……！！

ルイズ書き ガラ悪ッ

 閨斗の行動にマジで怯える親玉。親玉は手当てらしい手当てでもされておらず、

 傷だらけの血まみれ

 仕方なさそうに見ているルイズ。思い切りため息を吐いたりとか

 見かねて閨斗の肩に手を置くルイズ

ルイズ 閨斗、その辺にしておけ

閨斗 あー？ あー

不服そうな闘斗

ルイズにもめっちゃ渋い顔を向ける

イライラしているのがあからさまにわかる表情をしている闘斗

ルイズ

搜索して殲滅するまでが契約だ

早くしろ。飯の時間が遅くなる

闘斗

へいへいっと

やればいーんだろ、やれば

◆廊下、黒スーツが逃げていった方のルート

あからさまに機嫌が悪そうな闘斗

DIAを片手に、誰もいないことを確認しながら部屋の中を物色する

特に金目のものもなく、どんどんイライラしていく闘斗

闘斗

あー畜生。何でこんなことしなきゃなんねーんだよ、本当。十万ゲルト。十万ゲルトぼっちだぞ？

あのハゲ、しつこく値切ってきた上にこんなやべえ仕事、押し付けやがって

◆研究所、親玉を捉えている部屋

闘斗

ルイズ！ こっちにやなんもねーぞ

畜生……マジで損しかしてねえな、この仕事

帰ったらハゲに追加料金ふっかけてやる！

闘斗、相変わらず憤慨している

戻ってきた闘斗のその台詞を聞いて、ため息を吐くルイズ

SE

はあ

ルイズ

もういいだろう。やめておけ

闘斗

ああ？ これが文句、言わないでいられるかってんだ

ていうか、お前は何でそんなに冷静なんだよ！ さっきも言ったけど水脈誘導系

錬成結晶は高級羊肉八〇〇グラムと値段がほぼいっしょな

SE
びしっ

ルイズ
待て、闘斗

ルイズ、闘斗のことを手で制す

少し得意げなルイズの表情。何かあったことを示唆している
その様子を見てやや訝し気になる闘斗

ルイズ
まあそうなんだがな

闘斗
……なんかあんなのか

闘斗、意外そうな顔をする

不敵な笑みを浮かべるルイズ

SE
にやり

ルイズ
ああ。闘斗、この仕事の契約、どうなっていた？

はあ、とため息をつく闘斗

思い出しながら不機嫌そうな顔になる

闘斗
この施設中の全員をとっちめて、所長を生け捕りにしておけ、だろ

十万ゲルトの、十万ゲルトぽっちの、な！

SE
ガチャンッ

くるっと回したDIOをホルスターにしまい、腰に手を当てる闘斗

やっとな怒りが収まってきたのか、やる気のなさそうな表情に

ルイズの方は得意げな顔を崩さない

ルイズ
なら、そっちの部屋にあるものは、おれたちの好きにしていってことだよな
契約書を作ったお前ならわかるだろう

ルイズ、首で廊下の奥を示す

その先は親玉が来た方向。暗い廊下は先がわからない

闘斗
あ？ まあ、火事場泥棒ってのは俺らの常套手段だな

ルイズ
ちよつと来い

親指で奥の部屋を示すルイズ
閨斗も疑いながらついていく

観音開きの扉を奥へ開き、力任せに開けた形跡のある金庫に近寄る
開けた金庫の中に金ぴかの色々やゲルト、宝石などが大量に入っている。

SE
キラキラキラキラ……

閨斗
うおあああああああああああッ!!

閨斗の瞳、きらきらを映す。

このあたりから閨斗の顔を少し隠す

ルイズ
これは契約の内に、入っていないからおれたちのものだ

ルイズ、満足そうに言う

少し震えるようにして、閨斗は何かしらの感情を噛み締めている

閨斗、少しだけ顔を伏せる。引き笑いをこらえられない

閨斗
ひ……ひ……

ルイズ
ひ？

ルイズ、閨斗を覗き込む

次の瞬間、閨斗、飛び上がって喜ぶ

SE
閨斗
ひゃあっはああああああああ!! 金だ金だアア!
チャリンチャリンチャリン!

閨斗、「やったー!」「よっしゃー!」「ひゃっはー!」などと騒ぎまわる。その後、金品に走り寄る

ルイズ
SE
はしゃぐのいいが、気を付けろよ。さつきその辺で——
ずるっ

閨斗
うぽああッ

SE
ドサッ

闘斗 SE
いでで……
一匹、殺った

涼しい顔でさりとて言うルイズ

闘斗
ルイズ
遅い……さつさと言えよ、ルイズ・クリスターニャ！
うるさい。先走るお前が悪い

闘斗、コートを払いながら立ち上がる

闘斗
ああ、ちくしょー。最後の最後でカツコワル
ま、とりあえずかき集めますか

闘斗、手持ちのチョークで錬成陣を床に書く
そこらへんにあった布を陣の中に起き、袋を錬成
闘斗は二枚作ったうちの一枚をルイズに渡す

闘斗
ルイズ
ほれ、集めろ
ん

金庫の中身をざくざく集めるルイズと闘斗
たっぷり袋に詰める

闘斗、袋を背負って一息つく

闘斗
ルイズ
おし、これでいいな
ああ。当面、飯に困らない

ルイズもクールだが満足そうな顔
闘斗、まだ食べるのか、という顔

闘斗
ルイズ
お前はまたそれだな。この食いしん坊め
オマエの飯が美味いから仕方ないだろ

ルイズ、闘斗を見てにやりと笑う
同じく嬉しそうに笑う闘斗

闘斗
はっはっは！ 褒めても何も出ないぞー

二人は顔を合わせて笑う

SE
にっ

闘斗
それじゃ

ルイズ
今回も

拳を合わせ、互いと仕事の上出来を称える二人。

二人
We Did It !!

【了】

【以下、ノベル版】

金属音が、喧しく廊下に響いた。

次いで、さらに銃撃の音が鳴る。反響する暇さえも与えない、徹底的な射撃だったが、それらは獲物を捉えることはできなかった。

どンドンと湧いて出てくる黒いスーツに身を包んでいる人間。多くは男性だが、中にはパンツスーツの女性の姿も見えた。

「おい、ネズミはどこに行った」

「そっちを捜せ、七番通路も見て来い！」

大きい声と、銃撃音。足音と金属がうち合わされる音が重なり合う。

銃器を持った人間が建物の中を搜索しているのだ。彼らは皆、一様に焦りに駆り立てられた表情をして、殺気立っていた。

「畜生……どこにいやがる！ 早く出てこねえと頭ぶっ飛ばすぞ！」

銃器を持った男たちのひとりが、目の前の扉を開こうとした。そのとき――

「こんちゃーす、便利屋でえーす!!」

若い男性の、軽い声がした。

同時に、観音開きの扉が、男を跳ね飛ばすように蹴破られた。

「ぐあっ、がっ」

思わず、銃器を持った男はもんどり打って倒れる。なんとか気を確かにして、入ってきた男性の方を見た。

そこには、眼鏡をかけ、東洋風の衣装に三つ編みといういでたちの男性が――この街に根差す便利屋がいた。男には、彼の名前に思い当たる。そうだ、彼はこの街きつての便利屋――

「李……闘」

「あーら、名前、憶えてくれちゃって。嬉しいことこの上ねーわ。とりあえず、お届けもんがあるんだけど」

「な、くそっ、表の奴等は、見張りはどうしたんだ！ なんで便利屋がここにいる!？」

「その〈見張り〉ってのはこいつらのことか」

困惑する男に、何人かの人間がぶつけられた。

「ぐあっ」

起き上がりかけていた男は、再び地を這うことになった。おまけに、身体を強かに打ってしまった。起き上がるのに時間がかかるだろう。

「てことで、お届けもんでしたっ。サインなら要らないぜ」

大の男を三人もぶん投げられる怪力にも覚えがある。銀色の髪に紅い瞳。確実に、便利屋の
もう一人だ。

「ひゅーう。ルイズってばやるじゃん。さすが俺の相棒」

「褒めるのは後だ。ちゃっちゃと片すぞ」

「おいおい、褒められて嬉しくねえのかよ、ルイズ・クリスターニヤさんよお」

「今のところ嬉しくないな」

「何で？」

「そりゃあ」

言葉にしたそのとき、ルイズの腹が大きく鳴った。

「腹が減っているからに決まってるだろう！」

「おあー。やっぱりかー」

「閨斗。仕留めるぞ」

「おっけい！」

瞬間——閨斗の愛機、DIOが文字通り火を噴いた。

ばかり、という独特の錬成音。炎が空気を唸らせる声。そして人間の方へ向かった炎は、容
赦なく男たちを焼いた。

「はあーっはっはっは！ どうだよ、この新しい錬成クォーツは！」

轟々と音を立てて、炎は燃え上がる。

「ひ、ひいっ」

「助けてくれえ」

熱からなんとか逃げ出したものが数人、閨斗の視界の端にちらついた。

「右だ」

短い指示に戸惑うことなく、ルイズは閨斗の傍をすり抜けて炎がすぐそこに迫る部屋の中を
効率よく駆けた。

「ぎゃっ」

「ぐえっ」

一人目は、大きなサバイバルナイフを使って右手の銃を手首ごと落とし、そのまま下へ引い
て大きく転倒させながら喉笛へナイフを拳とともに打ち付けた。

二人目は左前方へ逃げようとした。それを計算していたルイズは、右手に残るナイフを二人
目の首もと、頸椎の辺りに投げつけた。そのままうつ伏せに倒れ込んだ二人目の頸椎を、ナイ
フの上から踏みつけた。

動こうとしてももう動かない、死体になりつつある二人を放って、ルイズは細かい人数を効率よく、闘斗は大きく部屋の中を確実に、それぞれ攻撃を続けた。

「あーあーあ。なんかもうなんか。なーんかなー」

「何だ、闘斗。何か文句でもあるのか」

「いやいや、文句う？」

非常に不機嫌そうな闘斗は、縄で縛り上げた上で床に座らせている、この集団の長に蹴りを入れた。

「あるに決まってるだろうがよ！ 何で俺がたったの十万ゲルトでクォーツを七個も使わなきゃなんねーんだよ！ 意外としぶといんだよ、この××××××××どもがッ！ ㄱ×××××××！！」

「ひいい、や、やめっ」

何度も闘斗は、長をDIOで小突く。その様子を見て、ルイズは「ガラ悪ッ」と呟いた。

闘斗には聞こえなかったようで、まだDIOで長の頭を小突き続けていた。

「闘斗、その辺にしておけ」

「あー？ あー」

「搜索して殲滅するまでが契約だ。早くしろ」

「へいへいっと」

言いながら、二人は各部屋を見て回る。大方、片付いた頃に闘斗とルイズは再び長がいる場所まで落ち合った。

「あー畜生。何でこんなことしなきゃなんねーんだよ、本当。十万ゲルト。十万ゲルトぽっちだぞ？ あのハゲ、しつこく値切ってきた上にこんなやべえ仕事、押し付けやがって……」

「もういいだろう。やめておけ」

「ああ？ これが文句、言わないでいられるかってんだ【三】

「まあそうなんだがな」

「ん、なんかあんのか」

「ああ。闘斗、この仕事の契約、どうなっていた？」

ルイズは、嫌な笑みを浮かべ闘斗を見る。それに疑問を持ちながら、闘斗はルイズの問に答える。

「この施設中の全員をとっちめて、所長を生け捕りにしておけ。だろ。十万ゲルトの、十万ゲルトぽっちの、な！」

十万ゲルト、十万ゲルト、と何度も喚く闘斗に、ルイズは人差し指を立てて言う。

「なら、そっちの部屋にあるものは、おれたちの好きにしていってことだよな」

「あ？ まあ、火事場泥棒ってのは俺らの常套手段だな」

「ちょっと来い」

閨斗は、ルイズが探した方の部屋へ連れていかれる。先導したルイズが扉を開くと、

「うおおあああああああああッ!!」

金庫の中に、大量の札束、金の延べ棒、その他にも無造作に貴金属が入っていた。大きな金庫は部屋の大部分を占めており、中のもものの価値を計算すれば、相当な額になるだろう。

「これは契約の内に、入っていないからおれたちのものだ」

「ひ……ひ……」

「ひ？」

ひひっ、ひひっ、と閨斗が引き攣るように何度か喉を鳴らし笑う。次の瞬間、閨斗は大きく飛び跳ねた。

「ひゃあっはあああああああッ!! 金だ金だアア！」

ぴょんぴょん、と閨斗が跳ねて踊る。次いで、金品に近づこうとする。

「はしゃぐのいいが、気を付けろよ。さっきその辺で——」

「うばあッ」

血だまりと死体の腕に、閨斗はつまづいてしまった。

「一匹、殺ったから」

「遅い……さっさと見えよ、ルイズ・クリスターニャ！」

「うるさい。先走るお前が悪い」

「ああ、ちくしょー。最後の最後でカッコワル。ま、とりあえずかき集めますか」

ルイズはそのあたりにあったばろきれを使い、再構築錬成を行って大きな袋を二枚作った。

「ほれ、集めろ」

「ん」

その後、手際よく二人は辺りに散らばる金品を、絶妙にばれない程度に頂いてから施設を後にした。

「おし、これでいいな」

「ああ。当面、飯に困らない」

「お前はまたそれだな。この食いしん坊め」

「オマエの飯が美味いから仕方ないだろ」

「はっはっは！ 褒めても何も出ないぞー」

二人は、視線を合わせた。そのまま、「にっ」といたずらっぽく笑って、『いつもの台詞』を口に出す。

「We Did It!」

後ろの方から警備ギルドの警笛が聞こえた。暗闇の中を、便利屋は駆け抜けていった。

【了】

【2800 文字】

【以下、プロット】

【一】

ハゲ親父との交渉シーン追加。

交渉内容は

「近頃、第三商店街で動いている嗜好物商が不審な動きをしている。Zettで監視をしているが、相手が私物の倉庫やM研究所の方向にいるため、尻尾を掴んでいるものうまく動けない。ちよっとしたことだから、やってくれ。殺すなら殺していい、ただし一人か二人は生け捕り。他、銃弾などは放っておいていい。どうせ薬物やなんかだろうから」というもの。

「猫探しから人殺しまで、俺たち便利屋にお任せあれ！」

と、それを受けた闘斗は、研究室にこもりクォーツを錬成。このときにクォーツやバル、DIO、DIAの説明。ルイズ目線の「なんだかわからないけどすごいものである」という感想、忘れずに。錬丹術が闘斗のルーツにあることも示唆。

【二】

バトルシーン追加。クォーツを消費しながら「二万ゲルト、高級羊肉五〇〇グラム!」「四〇〇〇ゲルト、コバルト系鉱石八〇〇グラム!」などと叫ぶ。

戦いながらルイズが「それは何だ?」と訊くと「これまで使ったクォーツの錬成に必要なつた金だ」と闘斗は答える。呆れながら、ルイズも淡々と戦いをこなす。

最終的に制圧したところ（この辺まで見せ場）で、親玉出てくる。Mの研究員。

「君たちが△に寝返ったのかと思った。流石の錬成テクニクだ、今からでも我々の仲間にならないか。世界を、救いたいだろうか?」

と誘われるも、二人は

「あんたにとっては『正義』かもな。だが、正義が『正義』である必要がどこにある!? 俺たちは、ただ俺たちであるだけだ!」
と断る。

【三】

▷とMのそれぞれの研究について少し。

どっちも「世界を救う」ことが目的なのに、何故、敵対しているのか。闘斗ははぐらかすが、ルイズはちよつと不服。

「オマエにとって大事なことから、オレにとっても大事なことだろう。いつか、話せ。それは約束だろう」と言わせる。

闘斗の悲し気な表情少し。